

坪内逍遙「当世書生氣質」とデイケンズ「二都物語」

劍持武彦

一、逍遙の父と藤村の父

坪内逍遙は明治改元という大きな社会変動を、十歳のとき体験した。逍遙六歳のとき、元治元年十一月、武田耕斎一派の水戸天狗党浪士たちが、逍遙の父、坪内平右衛門が代官手代を勤めていた美濃太田を通過するという事件があった。この時、父平右衛門は切腹覚悟で、この尊王の天狗党一味の無事通過をはかったという。この一行は伊那谷から清内路の峠を越えて木曾路に入り島崎藤村の父島崎正樹の本陣庄屋を勤めていた木曾馬籠を通過して美濃へ入て来たのである。木曾馬籠でも正樹のはからいで浪士たちは無事通過している。藤村は明治五年生れだから、勿論このことは後に知ったことだが、逍遙の場合は六歳の幼児としてこの武士たちをまざまざと目撃している。^(注1)

逍遙の父、平右衛門は尾張藩の武士であり、藤村の父、正樹は馬籠宿の本陣庄屋を継いだ人であったから、同時代に生きながらそのお互いを知ることにはなかつたのであろうが、ともに尊王思想を奉じる平田篤胤の流れをくむ国学の徒であった。国学の徒の息子たちはやがて明治の新時代に英学の徒として育っていくのである。

時代の尖端の思想が国学であった時代から、英学の時代へ大きく転換してゆく、その第一世代が逍遙の世代であり、明治ひとけた世代の藤村はその第二の世代と言えよう。

水戸天狗党の伊那路、木曾路、美濃路通過は水戸学の尊王の志士と、地方の平田国学の尊王の徒との出会いでもあった。藤村はこの天狗党の木曾路通過を後に『夜明け前』に記す。

『当世書生氣質』を明治文学における最初の長篇小説と考え、その後、戦前までの半世紀の近代文学の長篇小説の一つの到達点として『夜明け前』が考えられる。『当世書生氣質』の作者の幼時体験と、『夜明け前』のモデルである藤村の父の体験とが一筋の街道を通してつながっているのである。

二、日本文学の短篇抒情性

日本語の構造、日本人の発想は伝統的に著しく短篇抒情詩的であって、壮大な構想力をもって長篇叙事詩を構築する伝統を持たない。なぜなら、日本民族は大陸諸民族とその歴史的、地理的条件を著しく異にし、その固有の世界観を構築しなかつた。^(注2)素朴な自然信仰が現代人の意識においてすらその中核にあることを以てしてもそのことは明らかである。^(注2)気象の変化の激しい海洋に囲まれた温帯のひとつづきの島国である日本の国土には、原始時代において先住の民族と外来の民族との抗争のあつたことは、考古学的な痕跡を止めているが、大陸諸国のような圧倒的な征服被征服の関係でなく、歴史時代に入る頃にはヤマト民族を中心とする同化作用が進み、日本語、日本人の均質性はかなり高度に進んでいた。

それ以来、国土や言語が他民族から奪われるという歴史を持たない、世界でも稀有の歴史を経てきた。稲作による自給自足経済もはやくから確立され、世界各地が、内戦や植民地収奪戦にあけられた十七世紀から十九世紀末まで三世紀にわたる平和を保ち得たのである。かかる歴史的、地理的条件の国に深刻な世界観芸術が成

立しえなかつたことは必然である。

日本固有の思想として鎌倉時代の日本仏教の祖師たちの語り残し、書き残したものは大乘仏教思想の日本的受容として世界に誇るべきものであるとしても、その成立と展開はあくまで国内に限られていた。

太平記等軍記ものにその反映があるとはいえ、長篇叙事詩的な文学を生むことはなかつた。

平安朝文学における『源氏物語』と、江戸文学における『南総里見八犬伝』が日本における二大長篇小説として、日本文学を代表するほど、日本文学は明治文学までは長篇小説に乏しかつた。

『源氏物語』には白楽天の『長恨歌』、『白氏文集』が、『八犬伝』には『水滸伝』がそれぞれ意識されているが、『源氏』において光源氏中心の正篇と、薰大将中心の続篇とが、因縁によって関係づけられているとはいえ、各巻は短篇小説的にまとまっており、絵巻物のような連続性であつて、全体としての構築性はそれほど明確ではない。そこに行くくと『八犬伝』はその影響を受けたといわれる『水滸伝』より遙に構築的である。『水滸伝』には梁山泊に豪傑が次々と迎いとられる話が続くが、一つのパターンが少しづつ形をかえているのに過ぎないのに対し、『八犬伝』は空間的にも関八州に及び、八犬士のそれぞれの出会いにも工夫が凝らされている。

恐らく明治十年代まで長篇物語の模範は『八犬伝』だつたわけで、少年時代から馬琴ものを愛読していた逍遙は、『小説神髓』でまず文学独立宣言をし、文学の自律性を高唱した以上は、何としても馬琴的方法でない方法で長篇小説を書かねばという課題を自らに課したのである。

逍遙の『小説神髓』における馬琴批判には実に並々ならぬ決意があつた。馬琴的方法でない新しい方法で書くとしたらいかなる方法があるが、『小説神髓』は現在読みかえしてみると、西洋ではこのように文学が認識されてきたという啓蒙的解説の部分が多く、一種、文学概論の趣を持っている。逍遙は『八犬伝』批判において儒教倫理という思想を批判したのではなく、『八犬伝』が、思想宣伝の道具にされていることを批判したのである。文学それ自体の自律性を強調するために、いかに巧みに物語がしくまれていようとも生きた人間、喜怒哀

楽の感情という弱みを持った人間が写実されていなければならないとした。しかし馬琴の構想力、空想力については批判しえなかった。

三、ディケンズ『二都物語』

——社会変動と人間の運命——

従来『当世書生氣質』についての研究^(注3)は、逍遙の執筆当時の内面的事情が、この作品の作中人物の造型にいかん作用したかといった面での考察が主であった。作品論としてそうした追究の意義を認めつつも、この論では、この作品を世界文学的な大きな波動のなかでとらえなおしてみたい。

すなわち十九世紀写実小説の一つの課題、社会変動のなかにおける人間の運命の物語としてである。かかる視点からすると、逍遙がもっとも切実に意識し学んだのはイギリスの小説家チャールズ・ディケンズ（一八一二～一八七〇）をおいてほかには無いのである。ディケンズは長篇小説『ディヴィッド、コッパフィールド』（一八四九～一八五〇）で産業革命時代のイギリスの現実を背景に年少労働の問題を扱い、『二都物語』（一八五九）で、フランス革命時代のロンドンとパリを描いている。その他にも社会変動を民衆の側から描いた作品が多い。

ヨーロッパの近代を創った大いなる社会変動、イギリスの産業革命（一七六五～一八三〇）アメリカの独立戦争（一七七五～一七八三）フランス大革命（一七八九～一七九四）は、連動し、呼応しあった世界史的規模における社会変動であるが、この三つの社会変動を背景にしてフランス人貴族の青年と、イギリス人弁護士^(注4)の運命の物語が『二都物語』である。空間的にはロンドンとパリの出来事が平行して描かれるから「二つの都」の物語であるが、時代的にはフランス革命前夜の二七五五年から始まり、物語はパリを中心に起った革命に突入する。ギロチンでの惨烈な処刑が続くなかでフランス人貴族、イギリス名チャールズ・ダーネイ、（実名、シヤルル・サン・テヴレモンド）を救い、その身代りとして処刑されるイギリス人弁護士シドニイ・カートンの

高潔な心情の描写に終る。この物語の実際の主人公は始めは協役のように描かれているシドニー・カートンである。

『二都物語』の冒頭はまず時代そのものの異常性を高唱する。単文構造の対照的な短文を積みかけるように連射する印象的なセンテンスから始まる。

It was the best of times, it was the worst of times, it was the age of wisdom, it was the age of foolishness, it was the epoch of belief, it was the epoch of incredulity, it was the season of Light, it was the season of Darkness, it was the spring of hope, it was the winter of despair, we had everything before us, we had nothing before us, we were all going direct to Heaven, we were all going direct the other way—in short, the period was so far like the present period, that some of its noisiest authorities insisted on its being received, for good or for evil, in the superlative degree of comparision only.

There were a king with a large jaw and a queen with a plain face, on the throne of England; there were a king with a large jaw and a queen with a fair face, on the throne of France. In both countries it was clearer than crystal to the lords of the State preserves of loaves and fishes, that things in general were settled for ever.

右の原文の二段落め、一転してイギリスの王と王妃、フランスの王と妃のことが戯画的に叙せられ、それぞれの王をとりまく貴族は「どちらの国においても、パンと魚、国家及び仕着せの食い扶持を保障せられた貴族どもにとつては、世の相は万事永久に解決済みで、もはや事もなしということは、ほとんど自明であるがのように見えていた。」(中野好夫訳・岩波文庫)と皮肉っぽく書いたこのあとに一七七五年におけるフランス農民たちの窮迫した生活。イギリスにおける治安の乱れ、アメリカにおける独立の動きが叙せられる。軽妙と重厚を併せた長篇の書出しとして出色である。

四、カーライル『フランス革命』と『二都物語』

江戸の末期から明治の初期にかけて、長編の物語として最も親しまれていたのは一方において馬琴の『八犬伝』であり、もう一方は柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』であった。逍遙はこのいずれをも手本とせず、その長編小説に明確な一つの焦点を絞った。慶応四年（即ち明治元年）五月十五日の彰義隊の乱である。従来の『当世書生気質』論はこの一点を見逃している。なぜ見逃したかと言うと、逍遙が愛読し、作品の構成の上で意識したに違いないデイケンズ的方法、更に具体的に言えば『二都物語』の方法を、デイケンズの側から検討しなかつたせいである。逍遙がどのようにデイケンズを読んだか、文献的証拠が残されていないために、デイケンズの小説作法とその精神と逍遙のそれとを、構成上で比較してみることをしなかつたせいである。

しかし、ここに『二都物語』というデイケンズの代表作を採りあげて、その構想と構造の原点を探ってみると、『当世書生気質』の構想に何がヒントを与えたかが推定出来る。

デイケンズはカーライルの『フランス革命』（一八三七）を読み、その感銘から『二都物語』は構想したことは、そのデイケンズ自身の序文からも明らかである。

逍遙も恐らくカーライルの『フランス革命』は読んだであろう。逍遙十九歳のときには、すでに愛知県から選拔生として東京開成学校に入っていた。東京大学と改称されたとき、普通科予備門の最上級に編入されている。学科は国語漢文以外すべて英語で教授され、英文学に親しむ機会が多かつたという。^{注4}この時代のエリート
の英学生にとってカーライルはまず『英雄及び英雄崇拜』（一八四一）から入って、『衣裳哲学』（一八三三〜一八三四）にいたる必読書であつた。大きな社会変動を体験してきた逍遙にとって、『フランス革命』に関心を持つたことは想像に難くない。

カーライル読書を始め、とにかく逍遙には『二都物語』に熱中する要因があつたことは明らかである。

五、『当世書生氣質』の作品構成

文体が戯作的であることと、筋書きが因縁物語であることから、従来、いかに『当世書生氣質』が読み誤まられてきたかの一例として、江戸文学に詳しく高須芳次郎氏のこの作品への梗概(注5)を次に引用する。

維新の際、王事に盡した小町田浩爾の子小町田粲爾なる青年と浩爾が養女としたお芳とは、幼馴染の間柄であつたが、お芳は浩爾の妾お常のもとで養はれ、お常が藝妓をしてゐる關係から雛妓となり、間もなく田の次と名乗る売れつ妓となつた。粲爾は飛鳥山の花見にふと田の次に逢つてから、彼女も熱い思ひを寄するやうになる。その後の粲爾は、茶屋遊びをして學業をも忘れるやうになつたが、友人守山の友情に動かされ、忠告に従つて身を慎むやうになつた。ところが粲爾・守山の兩人と親しくする任那といふ學生の洋行送別會を、守山の父の發起で向島水神の八百松で開いた時、粲爾は吉原へ案内され、茶屋で圖らず田の次に逢つてから、焼木杭に火がついて、また學業がすさんで了ふ。粲爾の父が心配して、みつしり意見を加へる。學校の校長が彼の不身持を聞いて休學を命じたりしたので、彼も始めて恐縮し、田の次を忘れるともなく、いつしか遠ざかつて行つた。それで間もなく休學が許されて、眞面目に勉強する學生に復かへつたが、二人の交渉はやはり繋がつてゐて、田の次はいつまでも彼を忘れず、同棲する日の來るのをひたすら待つてゐるといふのである。なほ吉原の話の中に、娼妓の顔鳥は、實は粲爾の親友守山の妹と知れたといふロマンスが挟まつてゐる。

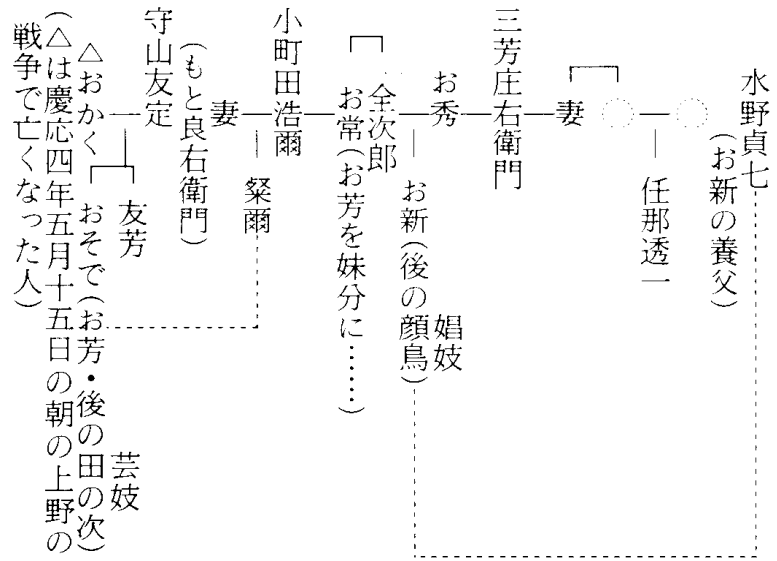
この梗概の記述のなかで明らかに誤読である箇所は「顔鳥は守山の妹」とある箇所で、これはこのあとで私の作った人物構成図に示されているように、守山友芳の妹はおそで、後の芸者田の次なので、娼妓の顔鳥は全次郎とお秀の娘である。それを友定の娘にしたてあげようとしたお秀とその実の娘（娼妓、顔鳥）の陰謀が、暴露されて、大団円にいたる筋立てである。田の次は友定の娘、友芳の妹であることがわかつて一件落着となる。

高須氏の概概では、この作品の原点である次の一事件のことに触れていない。「慶応四年（即ち明治元年）五月十五日、まだ早天程あさまさきほどなりけり。俄に上野の彰義隊と官軍の間に戦争起れり」（第十九回）という市街戦のさなか三歳ほどの幼い二人の娘がとりちがえられる。すなわち守山友定の妻おかくの娘おそで、お秀と全次郎の不義の子、お新とが、おかくが流れ弾に当って即死したために、お秀はそれはずみに自分の抱いていた子が投出され、おそでの方を抱いて逃げ去る。その一瞬のとりちがえによって、其の後の物語がすべて構成されている。この原点に注目することが、この作品の読みにおいて最も重要である。この事件が明治改元のこの年に起ったことを読み落してしまうと、この作品は単なる人情ばなし、因縁物語、先の梗概に示すように小町田粲爾と、お芳との色模様の物語として読まれてしまう。

この作品の表題もこの作品の誤読の原因となった。当時の学生風俗をユーモラスに描いた風俗小説であるかのような印象をうける表題である。表題が自然主義以降の作品のようにまじめなものでなく、八文字屋本の「氣質もの」を思わせるような表題であったからこの作品は誤読され、誤解され現代に到ったと言えよう。

この作品には本筋の人物と脇筋の人物が混在し、脱線してゆく章が多いため、この作品の本筋は何かということを示したい。そのため脇筋の人物を一切排除して、さきあげた作品の原点（慶応四年五月十五日朝の事件）に関わる人物をもとに次のような表にまとめてみた。（頁数は岩波文庫版の頁を示す。）

当世書生氣質・登場人物



この表に示されるように、この作品は三芳庄右衛門、小町田浩爾、守山友定という書生たちの父の世代と、書生たち任那透一、小町田粲爾、守山友定という息子たちの世代との二世代の物語になっている。実際のこの物語の「今」は明治十五年頃という設定であるが、この小説の原点、明治元年（慶応四年）のとき、父たちは三十代の壮年であり、息子たちは六、七歳である。父の世代は幕末維新の激動をくぐりぬけて、維新を創った世代であり、息子たちは若い明治の時代とともにこれから明治を創る人たちである。（作者、逍遙と同年代の人たちと言ってよい。）この時代はあらゆる分野での創業革新の時代であり、後の時代のように父の世代、子の世代での激しい対立は生じていない。むしろ、任那透一の外遊と守山友芳の卒業を祝うための会（第八回）に象

前篇（一回～十回）	後篇（十一回～二十回）
<p>庄右衛門の来歴（第八回） P・115</p> <p>お常の来歴（第四回） P・71</p> <p>浩爾の来歴（第四回） P・64</p> <p>友定の夢の話（第八回） P・119</p> <p>友定の来歴（第八回） P・114</p> <p>芸妓田の次の来歴（第四回） P・80（お芳）</p>	<p>貞七の来歴（第十六回） P・216</p> <p>ここで貞七がお秀の娘お新を救ったいきさつが語られる</p> <p>「明治元年五月十五日、俄に上野の彰義隊・官軍との間に戦争起りて」 P・217</p> <p>娼妓、顔鳥の来歴（第十六回） P・216</p> <p>俄然上野に戦争起りて ↑</p> <p>慶応四年（即ち明治元年）五月十五日 P・272 ↑ (第二十回)</p> <p>友定が「鈴木つね」の名で出した広告 P・210 (第十五回)</p>

徴されるような未来への期待がこめられている。この会の主催者、守山友定はもと幕臣であったが、

旧幕の人には珍らしい機変家にて、世とともに推移りての商法三昧、着眼点めづりどころがよかりしにや、七八年静岡にて、某会社の社員となり、頗る繁昌なる身の上となりぬ。某商売は何なりけん。作者も糢糊に聞きつるのみゆえ、いましもこゝには告げ得ざれど、正しく外国へ輸出すべき、日常必需いりようなる品とぞ聞えし（第八回）とあるように、社会変動の時代をうまく乗りきった成功者である。

「当世書生氣質」の語りの原点が、慶応四年五月十五日の上野の戦争に起った一瞬の出来事、幼女のとりちがえにおかれていることをさきに指摘したが、そのことをさきに示した人物構成図に照すと、このことが、第八回、守山友定の夢の話にまず予感され、読者に示される。

其夢の大略を申しますれば、妻はあの折金杉の親戚の方へ落逃おちのびようといたして、末女を抱きて逃ゆきました処、凶らず流玉に中りまして、敢なく其処へ絶命いたし、小児は一個取残されて、是も命が危いところへ折よく通かかった人があって、末女を拾ひあげて立去りましたが、処が其拾ひあげた男といふは、あまり素性のよろしくない人物で、末女を十三、四歳まで養育そだてしましたが、竟に金銭に窮迫いたして、たしか吉原歟と思ふ遊廓くるわへ、娼妓に売ったといふ来歴をば、まざまざと夢に見ましたゆゑ。

とあり、この夢の話での末女はおそでのことで、桶川の老女に育てられてお芳と名づけられ、小町田浩爾の権妻お常にひきとられて、やがて芸妓となる田の次のことである。

浩爾の息子粲爾と、守山友定の息子、友芳は書生どうしの友人としてこの作品の中心的人物であるかのように見えるが、実は芸妓になった、おそで、お芳、田の次と名をかえる一女性と、幼名お新で娼妓となっている顔鳥とのとりちがえが原点におかれていると見ると、この二人こそ中心的人物と見られる。

二代目として友人としての縁につながる青年たちは一代目の三人、三芳庄右衛門、小町田浩爾、守山友定のつなぎ役となつていけると言える。

さきに引用した友定の夢の話は、後篇第十五回で、友定が「鈴木つね」の名で出した尋ね人広告と呼応し、第二十回の大団円に講談調で語られる「慶応四年（即ち明治元年）五月十五日あさまだきほどまだ早天程なりけり」に始まる一節で、事の次第がすべて明かになり、作品がしめくくられる。

六、結び

『当世書生氣質』は文体の多様な使いわけからも注目される作品である。書生どうしの対話の場（第二回）には滑稽本の手法が、男女の語り合いの場（第十二回）には洒落本から人情本風の会話体が、一気に事のいきさつを語る大団円の間では講談調がというようにそれぞれ使い分けられている。まさにこの作品は長篇小説の実験作で、文体上も、戯作文体の見本市のような観を呈している。しかし文体と、その部分々々の戯作的趣好に目を奪われていると、この作品の全体としての眼目を見失うことになる。部分部分の趣好は戯作めかしてあるが、この作品は明らかに長篇小説をいかに構成すべきかの実験作であった。その構成にディケンズの長篇諸作のなかでも最も「構成力のある作品」といわれる『二都物語』が作用していることは疑いない。

フランス革命という大変動の時代におけるロンドンとパリの二都市にまたがる『二都物語』と、江戸から東京への移行の時点での「上野の戦争」に原点をおく『当世書生氣質』ではそのスケールの大きさにおいて、後者は前者に及ばないことは言うまでもないが、「慶応四年五月十五日」という歴史の回転の軸に原点をおいた作品として、この作品を再検討してみた次第である。

もとより『二都物語』との作品としての細部にわたる比較検討ではなく、社会変動という一点に絞っての考察であった。

ディケンズ文学から逍遙が何を学んだかという点で、表現の技法、ユーモアと写実については既にディケンズ研究の専門家、松村昌家氏によって、「小説神髓」での逍遙の所説とも併せ、且つディケンズの他の作品にも

言及しつゝ、詳細な研究がある。^(注7) 又、近くは日本近代文学の研究者、岡保生氏によって、逍遙への影響を『ピックウィック・ペイパー』から『当世書生氣質』への技法上の影響として論じておられて、^(注8) 松村氏の先行の論との一致点も多い。これは英文学の側からと国文学の側からとの望ましい研究例となった。

本論は右の二氏の論が、微視的に、実証的な比較影響関係の論であったのに対し、巨視的に、社会変動に構成上の原点ないし焦点をおいて長篇を構成した点を論じ、ディケンズの構成力、ひいてはディケンズの長篇小説の精神に逍遙は学ぶところがあつたのではないかと論じた次第である。

ディケンズの『二都物語』が成立するまでにはリチャードソン(一六八九―一七五一)やフィールディング(一七〇七―一七五四)以来のイギリス市民文学がある程度の成熟に達していた。産業革命の先進国であつたイギリスは、市民文学の長篇小説においてもヨーロッパの先進国であつた。

日本の明治十年代から二十年代にかけては政治経済思想のみならず、文学においても市民文学の先進国イギリスは強く意識されていた。

新しい時代の長篇小説を模索しつゝあつた逍遙の最初の本格的な試みとして「社会変動」の時代を描く物語として『当世書生氣質』が構成されたことは時代の必然でもあつた。

(平成四年十月十日稿)

注

(1) 柳田泉『若き坪内逍遙』明治文学研究第一巻、春秋社、昭35・9、二十八頁

(2) この問題は拙著の一連の比較日本学シリーズ(一)間の日本文化(二)比較日本学のすすめ(三)比較日本学の旅、(ともに朝文社刊、平成四年七月、八月、十月)参照

(3) 中村完「書生氣質」の世界。『坪内逍遙論―近代日本の物語空間』(有精堂、昭61・2)に所収の論文。右論文では「書生氣質」研究の先行論文、越智治雄「書生氣質の青春」、関良一「当世書生氣質」考、清水茂「当世書生氣質の周辺」、和田繁

二郎「逍遙再評価の試み」といった各氏の論も紹介されている。

- (4) 注(1)の書、八十九頁
- (5) 新潮社版『日本文学大辞典』第五卷、二百十三頁(昭和26・1)
- (6) 中野好夫訳『二都物語』新潮文庫版下・昭42・1解説三三三頁
- (7) 松村昌家「坪内逍遙とディケンズ——写実と滑稽に関連して——」『比較文学』第十一卷、(昭43・10)、同「坪内逍遙とユーマア論」比較文学第十八巻、(昭50・10)
- (8) 岡保生「逍遙とディケンズ——書生氣質の場合——」『近代文学新攷』新典社(平成3・3)、岡保生「逍遙とディケンズ後語」『学苑』(平成3・8)。

付記 本稿は平成四年六月二十日、日本比較文学会第五十四回大会(於、東北大学)で口頭発表した草稿「坪内逍遙、『当世書生氣質』とディケンズ『二都物語』」をもとに、其の後、訂正、加筆したものである。